

氏 名(本籍)	野 上 玲 子(東京都)
学 位 の 種 類	博士(体育科学)
学 位 記 番 号	甲第74号
学位授与年月日	平成30年3月10日
学位授与の要件	日本体育大学学位規程第5条の学位は、大学院学則第29条の規定により、 大学院研究科博士後期課程(博士課程)を修了した者に授与する。
学 位 論 文 題 目	オリンピックの平和構想に関する実践哲学 — イマヌエル・カントの哲学を手掛かりとして —
審 査 員	主査 教授 関 根 正 美 副査 教授 石 井 隆 憲 副査 教授 近 藤 智 靖

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は上記題目の主論文ならびに関連論文3編をもって提出され、審査に付された。

本論文の概要は以下の通りである。

近代オリンピックはクーベルタンの哲学原理のもとに「平和な社会の推進を目指す」との国際的な使命をもって開催されている。しかしながら、その「平和」の概念が多義的でありオリンピックにおける「平和な社会の推進」という行為が不明確であるとの問題意識から、申請者はオリンピックにおける平和の意味を根源的に捉え直し、オリンピックの平和構想を原理的に明示することを目的として設定している。先行研究の検討の結果、3点が論文の具体的な考察課題として明らかにされた。方法としては、I. カントの平和思想から「平和とは何か」、「人間とは何か」との問いの裏付けとなる諸概念を援用し、オリンピックの事象と照応しながら議論を進める方法を採用した。

本論は4章で構成されている。第1章では、これまでのオリンピック研究の動向やオリンピックにおける「平和」の実相、近代オリンピックにおける戦争と暴力との関係史が記述され、国家や民族同士の敵意のない平和状態に基づく平和構想の提示がオリンピックの平和構想の課題であることが示された。

第2章では第1章での課題を検討する際の方法となるカントの平和思想が整理されている。第1節ではカントの「自然哲学」から「競争精神」が取り上げられ、自然の最終目的は競争精神による欲望を通じて人間を普遍的な「世界市民的状態」へ向かわせると述べられている。第2節では前節の議論を受けてカントの「コスモポリタニズム」概念に注目し、この世界市民的な観点が現在のオリンピック体制に示唆を与えると指摘している。第3節では道徳(実践哲学)の問題を扱い、カントの「尊厳」(Würde)概念を抽出し、尊厳を持つ理性的存在者の道徳性は「個」から「類」という共同体によって発揮され継承される点を指摘している。さらに政治を道徳と両立しうるように取り扱う「道徳的政治家」の概念に着目し、オリンピックの平和構想に求められる人間性を確保している。以上、第2章において本論文の目的達成のための方法概念が確保されたことになる。

第3章では、第2章で明確化されたカントの世界市民法に基づく「コスモポリタニズム」を方法概念として使用し、オリンピックと国家の関係についてオリンピックの事象と照応しながら考察がなされている。その結果、各国家の代表者からなる「平和連合」を創設し、オリンピック運営の権限を持たせることでオリンピックが平和と強固な関係を築くことができるとされている。また、オリンピックでの必要以上の交流は相手国の経済を揺るがす事態を招く恐れがあることから、オリンピックにおける国家や個人の交流には「制限された友好の権利」が必要であるとの指摘がなされている。

第4章では、前章の内容を満たすために必要とされるオリンピックにおける人間の尊厳と道徳性の問題が考察された。その結果、尊厳を有する道徳的な主体としての人間が「類」という共同体として存在し拡散することによって、オリンピックに平和状態をもたらすことが可能になると指摘している。

以上、本論の考察の結果、オリンピックに「敵意のない平和状態」を創るための平和構想の原理とは、法的体制によるコスモポリタニズムの確立とIOC委員をも含むオリンピックに参加するすべての人々の道徳的意志によって表出されるものであると結論づけられている。

以上の論文に対して審査を行った結果、以下の通りとなった。

これまでオリンピックと平和を結びつける先行研究が蓄積されてきたものの、オリンピックが目指すべき「平和」の概念が不明確であり、オリンピックにおける平和の原理を提示するまでには至っていなかった。このような学術的状況に対して、本論文が「敵意のない平和状態」という平和概念を導き出し、「コスモポリタニズム」および「尊厳をもつ人間」の概念からオリンピックにおける道徳的共同体の原理を明らかにした点に、学術的貢献が認められる。とりわけ、オリンピックが平和の祭典であるための原理を明らかにした点は本論文の独自性であり、社会的意義も大きい。全体を通して文献の解釈は妥当かつ精確になされていると判断され、論述の論理性に関しても妥当であると確認された。

最終試験においては、申請者による論文に関しての説明後に質疑応答がなされた。申請者は論文の内容および方法に関して審査員からの質問に的確に答えている。本論文に対して審査員から一部の語句に関する修正の要請がなされたが、それは形式上の指摘であり、論文の価値を損なうものではない。

以上のことから、審査員は本論文を博士論文として全員一致で「合格」と結論づけた。

最 終 試 験 結 果 の 概 要

これまでのオリンピックと平和の研究史においては「平和」の概念が不明確であり、平和の原理を提示するまでには至っていなかった。このような学術的状況に対して、本論文が「敵意のない平和状態」という平和概念を導き出し、「コスモポリタニズム」および「尊厳をもつ人間」の概念からオリンピックにおける道徳的共同体の原理を明らかにした点に、学術的貢献が認められる。全体を通して文献の解釈は妥当かつ精確になされていると判断され、論述の論理性に関しても妥当であると確認された。

最終試験においては、申請者による論文に関しての説明後に質疑応答がなされた。申請者は論文の内容および方法に関して審査員からの質問に的確に答えている。本論文に対して審査員から一部の語句に関する修正の要請があったが、それは形式上の指摘であり、論文の価値を損なうものではない。

以上のことから、審査員は本論文を博士論文として全員一致で「合格」と結論づけた。